石田　浩著

『中国同族村落の社会経済構造研究——福建伝統農村と同族ネットワーク——』

関西大学出版部　1996年　xv＋354ページ

中生勝美（なかおかつみ）

I

本書は，1987年から足かけ9年間にわたる，中国福建省晋江県龍湖郷一帯の施姓一族の同族組織と，その移住先である台湾の同族組織についての調査報告である。本書の構成は次のとおりである。

序　章　中国農村研究と社会主義
第1章　福建における同族結合とその分化——移住と分節——
第2章　同族組織と地縁組織との関係——潯江派——伝統農村と社会主義建設
第3章　同族組織の分節形成と祖庁——潯江派——
第4章　僑郷における同族ネットワーク——銭江派——分節と社会主義基層組織
第5章　僑郷における郷村建設と経済開発——社会主義下の華僑援助——
第6章　伝統社会の復活と華僑・華人——僑郷における郷村建設——
第7章　移民社会台湾の同族結合と宗親会の形成
第8章　晋江満族粘氏の台湾移民とその族的結合

本書は個別に発表された論文をまとめたもので，内容的に重複が見られる。そこで(1)本書の中心的課題である同族組織，(2)1949年以降の社会主義改造から80年代の改革開放政策にかけての変化，(3)海外の華僑とのつながり，の3点にまとめて要約する。

まず，著者が重点的に調査をした福建省晋江県は，フィリピンに多くの華僑を排出した施氏同族の出身地として有名な地域である。フィリピン華僑の施氏に関しては，施振民の「比律賓華人文化的持続」というすぐれた研究が公表されており(注1)，海外の華僑と国内の同族がどのように接触し，影響を及ぼしているかという点は非常に興味深いテーマである。著者は，現地に赴き，施氏の「族譜」（家系図）を精力的に集めて系図を復元している。第1章では，晋江県の施氏が居住する村落を一つ一つ回り，1980年代から90年代にかけて修復された族譜や，同族の共同祭祀を行う建物である「祠堂」の復元情況を精力的に報告している。

次に，この地域では，1958年に迷信に反対する政治運動が展開されたようであり(注2)，運動の期間だけ祠堂から位牌を各家に持ち帰って破壊から守り，1年後に運動が終息してから元に戻したという（30，148，154ページ）。しかし，文革中は祖先祭祀の活動などできなくなり，また同族の共有地は土地改革によって分配されたため，祠堂の修復や祖先祭祀の儀礼に必要な経費を捻出する財政的基盤がなくなり，同族の活動は衰退していった。その後1980年代の開放政策により，香港やフィリピンから華僑が里帰りする機会が増え，彼らの寄付金により多くの祠堂が修復された。著者が調査に入った1980年代以降は祠堂の祖先祭祀も復活している（31，61，150ページ）。このほか，古い祠堂に残された碑文や収支決算の帳簿など，現地調査で目に触れた資料を本書に掲載している。残念なことに，これらの資料に基づいた聞き取りはほとんどなく，その資料の説明は，内容の翻訳と著者の推測だけに終わっている(注3)。

また，著者は以前からの研究で一貫して主張している伝統的同族組織を利用した農業の集団化を，調査地の事例で証明しようとしている。これは第2章で主に論じられているが，衙口村の土地改革から人民公社化に至る過程で，同族の分節単位により生産隊が構成されたことを通時的に明らかにしている（94～98ページ）。この村では，同族が分節単位に集まって居住しているため，同族の分節単位が地縁組織と重なっていた。それゆえ，1980年代にフィリピンの華僑の寄付で廟が復活したときに，地縁組織の廟が同族の分節祖を祭る祠堂を兼ねていたのである

(98～107ページ)。そこで，著者は地縁組織と同族組織が一体化していると分析している。この章の結論部分は，この論文の共同執筆者である中田睦子氏の分担であると思われるが，同族結合が地縁性を不可欠な条件として発展するというエミリー・エイハーン(Emily M. Ahern)の見解は，この事例に当てはまると指摘している。さらに，ヤン(C. K. Yang)が広東省の事例から導いた，1950年代の社会主義改造においては，同族組織を排除して社会主義体制が建設されたという見解に対して，著者は同族を利用した農村改造もあったと反論している（115ページ)。

第3に晋江県出身の華僑が，いかに郷里との関係を保ち，郷里の同族とのチャンネルを通じて地元への公共投資を誘致しているかについて，文献資料を中心に分析している。著者は，近年フィリピンへ移住した華僑（この移民一世の親族は故郷に健在である）がおり，里帰り・郷里への送金・公共投資（学校や道路建設)，さらに同族が共同祭祀する廟の再建資金を援助していると指摘する（222，232，234ページ)。1987年の晋江県華僑情況センサス(注4)によれば，晋江に祖籍（本籍）を置く華僑は約124万人で，フィリピン在住が約65万人，香港・マカオ在住が約30万人であるという(注5)。香港・マカオへの移住は1949年以降に顕著になり，80年の香港人口の6％が晋江出身者であると指摘している（196，254ページ)。

II

では，以下で本書の評価を述べてみたい。

本書の「あとがき」にもあるように，第2章が中田睦子氏との共同執筆である以外は，単独論文として1989年から94年までに発表した論文を収録したものである。そのため，地図や系図が重複している。「あとがき」によると，「初出の章から引用する煩雑をさけるため」であるという。しかし，第1-4図，第2-1図，第3-1図，第4-2図は，いずれも晋江施氏一族の分布図であり，全く同一のものである。本文中にこの図に基づいた言及がない場合，同じ分布図が繰り返し出てくる必要性はない。また第1-2図と第2-2図は，同じ系図であり，そこに記載された人物を説明する記述の部分はかなり重複している。単行本にまとめるにあたり，重複部分の調整が必要であったと思う。

多数の著作がある石田浩氏の研究について，評者はこれまで一貫して次のような問題があると考えてきた。それを列挙しておくと，(1)先行研究と本人による実地調査との関連性が薄い。(2)事実関係の羅列だけで，実質的な分析まで至っていない。(3)具体的な事実関係の積み重ねが少なく，表面的な観察と聞き取りに終わっている。残念ながら，本書を読んだ後にも，同じような不満が残った。

(1)について。浜下武志氏は華僑研究を次のように総括している。まず，移民の原因について経済的，政治的，社会的理由が分析されたが，こうした「排出力」に関する議論と同時に，移民先の「吸引力」に関する研究も進められ，移民先の植民地問題も包摂されるようになった。そして今後の華僑研究の方向性として，仲介機関を介した移民一帰国の往復による多地域間移動のネットワークが形成された事態へ関心を寄せるべきであると指摘している(注6)。この研究史から見ても，本書は先行研究との関連性が薄い。

評者の知る限りでは，華僑を「排出力」と「吸引力」の双方から分析する古典的な方法論で，華僑と出身地と移民先の関係を有機的に描き出した先行研究として，ジェームズ・ワトソン(James L. Watson)の業績がある。ワトソンは，その著書『移民と宗族』(注7)で，イギリスへ移民した華僑が香港新界の出身村との絆を維持している現象について，香港側の「排出力」とイギリス社会が単純労働者を求める「吸引力」とに分けて分析している。この方法論は，香港に限らず華僑が多い他の地域でも有効であると思う。ワトソンの研究では，出稼ぎを必要とする経済構造以外に，社会関係として海外の同族が維持する人間関係の絆だけでなく，イギリス渡航時の借金を返済するために移住先から送金するシステムを具体的に分析している。香港新界の同族が管理している一族の共有財産から，渡航する同族のために準備金が貸し付けられていた。著者の調査村で，こうし

た先行研究を意識した聞き取りがなされたようには思われない。ワトソンは実地調査に基づいて移住・同族・共有財産・送金などの個別の社会的要素を有機的に連関させるのに成功しているが，本書には個別要素の記述しか見られず，相互の連関は見当たらない。

また個別事例の記述も，十分とはいえない。例えば，同族共有財産について，祠堂内部にあった康熙38（1699）年の碑文が採録されている。著者は長老から聞き取った族産と碑文の財産とは異なると指摘し，長老が答えた族産は自分の記憶する時代のことだろうと推測している（84ページ）。けれども，1699年の記録と長老が記憶する20世紀初頭の族産が異なるのは当然であろう。また，同族の規約である「族約」から，族産の経営について分析しようとしているが，文書にある祖先祭祀の費用の負担や，族員の治療費負担，結婚・葬儀の援助，貧困者や学生への援助といった支出を指摘するにとどまっている。そして聞き取りで明らかにされているのは，祖先祭祀のために会食を年1回するということのみで，詳しい支出項目については不明である。聞き取り調査を行う場合，適切な応答者に出会うかどうかが鍵であるが，同時に調査者の問題意識も重要である。

さらに，華僑送金が文革中にもかかわらず，中断なく続いていたと指摘している（197，240ページ）。著者は，この事実を新しい発見のように述べているが，広東省農村では1970年代でもすでに華僑送金を重視していたという先行研究がある(注8)。

浜下氏の指摘にある多地域間移動のネットワーク形成については，本書の書名にもなっているように著者の問題意識の中心であると思われる。福建・台湾・フィリピンの結びつきや，各地の華僑団体が相互に連絡を取り合うなかで形成されたり，変容を遂げるプロセスについての記述は，一定の成果を上げていると言えるだろう。

(2)について。族譜の分析に大きな問題がある。本書では，熱心に系図を復元しているが，必ずしも全部が同族全体の系譜関係を復元できているわけではない。例えば第1-2，3図と第1-11図は，ある程度同族全体の系譜関係を表しているが，第1-5～9図は，一つの家族の祖先をたどり，その祖先の兄弟だけを示している。つまり系図としては意味があるが，同族組織を解明するための同族全体の系譜ではない。祖先の兄弟だけでなく，その子孫全体が復元できていなければ，同族の「組織」を分析する基礎資料にはならない。著者が族譜と系図を混同しているところに問題がある。

評者も，農村調査では，最初の段階で同族の系譜関係を復元するが，祖先の兄弟とその子孫まで聞かなければ同族の全体像はつかめないと認識している。このような調査では，息子がいない場合，中国では厳密な父系制であるため，兄弟やイトコの息子を養子として迎える「過継」という事例が必ず出てくる。著者が復元した家系図には，このタイプの養子が全く記録されていない。あるいは族譜にそうした記載がなかったとも考えられるが，聞き取りの際，このことが著者の問題意識として念頭になかった可能性もあろう。このため祠堂での祭祀の説明においては，「有力者のみを祭祀の対象にし，しかも婿入者や養子等の非血縁者を除外したきわめて厳密な父系血縁原理が貫かれていた」（142ページ）という誤った解説がなされているのである。この部分も，善意に解釈すれば，「婿入者」とは日本の「婿養子」に相当するものであり，「養子」は同族外からの養子を指すのかもしれない。しかし，そうであれば記述方法に問題がある。

著者が分析対象と考えている同族の「組織」を明らかにするためには，同族全体の系譜関係を明確にし，その居住地，祖先祭祀での役割，同族の共同祭祀を行う祠堂の経営，海外に居住する華僑との連絡と寄付の要請，その責任者など，「組織」としての実態を解明する必要がある。確かに個別の情報は報告してあるが，個々の社会的要素間の有機的連関について，説明や分析が乏しい。

(3)について。前述した系図に関しても，復元した系譜に基づく聞き取りが欠如している。そのため，海外の同族から贈られた寄付金や墓参りのための収支などは帳簿の筆写にとどまり，寄付金を寄せた華僑の人物像や，具体的な支出内容については明らかにされていない。

また，本書には福建省福清県の調査も採録されているが，これらの資料から，福清県から日本やアメリカなどへ非合法な手段を使って出国する出稼ぎが多い原因，海外へ出国するためのコネとしての同族関係の戦略的利用，コネのない人間の密出国といった問題については読み取れない。これらの問題は，いわば中国社会の影の部分であり，本質的なことが把握できても活字にできない部分があるのは事実であろう。しかしそうであっても，非合法移民を排出する社会構造へアプローチする視点が欲しい。

さらに，1949年以降の香港とマカオへの移住について疑問がある。これは，1996年3月に評者が広東省台山県を調査した際に聞いたことであるが，土地改革時に階級（中国語では「成分」）を「地主」や「富農」と決定された者は，海外に同族や親戚がいた場合，「成分」を「華僑」に変更できたので，彼らのほとんどが50年代から60年代にかけて，香港・マカオへ移住したという。広東省の潮州を調査している香港の友人に確かめたところ，彼の調査地でもそのような事例は非常に多く，華南では一般的なことだと言っていた。著者も，調査地で1949年以降の海外移民が多かったと指摘しているが，福建省でも広東省のように「成分」を華僑に変更する措置により香港・マカオへ合法的に移民ができたのか，そして移民は政治運動や社会変動に関係があったのか，疑問が残るところである。

本書を通読すると，同族の「組織」を考える上で参考になる資料が若干散見される。例えば第7-3図に示されているように，台湾彰化県施氏の祠堂である真如殿では，同族の分節ごとに分担して順番に祭祀を行っている（273ページ）。祭祀集団が長男系統の「大房」，次男系統の「二房」，三男系統の「三房」に分節しており，祭祀の順番は「三房」→「二房」→「大房」→「三房」……のローテーションで回っている。祭祀を受け持つ集団については，「二房」のように全体で引き受ける場合もあれば，他の「房」のようにさらに下位の集団で引き受ける場合もある。これは，同族のなかでも人数が増加して繁栄している分支（同族の下位分節）はさらに細分化しているので，下位集団で祭祀を引き受けているが，そうでない分支はいつまでも分節できないので，全体で祭祀を行わざるをえない。構成員の多寡で，祭祀集団の範囲が決定されたり，また祭祀集団の適正規模が規定されたりすることを示す資料として興味深い。しかし，著者は資料を筆写しただけに終わり，これに基づく聞き取りをしていない。祭祀で支出する費用，その費用を負担する同族成員の人数，世話人の役割，など具体的な活動内容を聞かなければ，同族がいかに「組織化」されているのか分析できないであろう。

著者は「序章」に問題意識と研究の方法を述べているが，評者にはこれが必ずしも本書の全体像を示すことにつながるとは思われない。確かに精力的な調査をしていることは，調査データに表れている。しかし，資料を並記するだけでは，同族組織の全体像と海外の華僑が郷里に及ぼしている作用を有機的に連関させるシステムは見えてこない。本書の冒頭に「筆者自身の研究対象も大きく変化した。しかし，当初の問題意識はあまり大きく変化してはいない」（1ページ）とあるように，同族組織とか伝統社会の枠組みを事前に設定し，新しい調査地のデータをそれに当てはめている著者の研究姿勢に問題があるのではないだろうか。著者の専門は農村経済学であり，評者の社会人類学とは専門が異なっていることから，調査方法と分析に違いが生じるのであろうか。

以上，批判的な意見を述べたが，苦労を重ねて調査をした成果を全面的に否定しているわけではない。評者が本書を読んで興味深いと思ったのは，第8章の部分である。晋江県から台湾へ移住した満族粘氏の移住の経緯に関する口頭伝承など，メスキル(J. M. Meskill)の台湾中部彰化県霧嶺の林一族の研究(注9)を彷彿とさせて，興味深い歴史を掘り起こしている。また，1923年に族譜を筆写させるなど大陸の同族との交流があり，80年代に入り郷里の同族が満州族の民族出自を上級機関に申請するようになって，台湾の粘氏も民族意識に目覚めさせられたという記述がある。ここでは，新たなエスニック・アイデンティティの形成が中台交流と同族組織の再編に連動している点が読み取れ，非常に興味深い。これ

は，よい調査対象と出会ったことと，エスニシティの形成が著者にとって新しいテーマであったために固定観念にとらわれなかったことが幸いしたのだろう。

フィールドワークによる研究には，困難がつきものであるが，現地に行かなければ文献だけからは決して分からない事象が山積している。文献の使用に際して，文字に書かれた背景を理解し，現地で調査する前よりも深く読み取ることができるようになるのも，フィールドワークの成果の一つである。しかし，先行研究を踏まえ，それに対する独自の見解を構築する思索があってこそ，フィールドワークでの肉体的苦痛を償いうる研究になるのではないだろうか。

（注１）『中央研究院民族学研究所集刊』第42期 1977年　119～206ページ。

（注２）評者が調査をした山東・河北省農村では，1964年前後の「四清運動」により，伝統的な習慣や歴史的遺物が破壊されている。また『チェン村』に報告された広東省の村では，「四清運動」の時に反迷信運動を展開し，廟や祠堂を破壊した (A. Chan, R. Madsen, and J. Unger, *Chen Village : The Recent History of a Peasant Community in Mao's China* 〔Berkeley : University of California Press, 1984〕, pp. 87-89)。福建省だけが1958年に反迷信運動を展開したのは，大躍進運動か人民公社化の過程に付随してのものかどうかは，本書を読む限り明らかにされていない。

（注３）例えば第２章と第３章には，祠堂修復のための経費を記録した収支決算表と寄付者名簿を収録しているが，それについての詳しい聞き取りはない。ちなみに両者は同一のものである。もしも現地で多少多く寄付を出した同族の系譜関係や職業，人物評などのコメントをインタビューしていれば，郷里へ寄付する華僑像が具体的になり，収集した資料の社会的意味が明らかにできるはずである。

（注４）晋江県情調査組編『晋江巻』（中国国情叢書――百県市経済社会調査）北京　中国大百科全書出版社　1992年。

（注５）著者が196ページに掲げている統計数値は，香港・マカオ在住者の算入方法が不明であり，また華僑の総合計数が合わない。

（注６）浜下武志『香港』筑摩書房　1996年　138～139ページ。

（注７）ジェームズ・L・ワトソン著　瀬川昌久訳『移民と宗族――香港とロンドンの文氏一族――』阿吽社　1995年。

（注８）この研究では，香港への不法入境者に対するインタビューに基づいて，華僑送金は1949年以降も変化は少なかったが，70年代の文革中などは外貨獲得の手段として積極的に奨励されさえもしたことが指摘されている。W. L. Parish and M. K. Whyte, *Village and Family in Contemporary China* (Chicago : University of Chicago Press, 1978), p. 27.

（注９）J. M. Meskill, *A Chinese Pioneer Family : The Lins of Wu-Feng, Taiwan 1729-1895* (Princeton : Princeton University Press, 1979).

（和光大学人間関係学部助教授）